

「第6回まことの保育全国 セミナー」開催報告

保育連盟研修委員会



2018年6月21日(木)・22日(金)の2日間にわたり、築地本願寺において「第6回まことの保育全国セミナー」が開催されました。120名の方々が参加され、ともどもに学びを深める機会をいただきました。

築地本願寺の本堂でのウェルカムコンサートとしてパイプオルガンの荘厳かつ華やかなメロディーに引き続き開会式が行われました。

開会式では、本年度より保育連盟理事長に就任された高輪真澄理事長が、今後の保育連盟の方針として「ともに生きる・助け合いを根本とする」「新しい制度・保育指針・教育要領等への対応」「まことの保育(仏教保育・真宗保育)の推進」を3本柱とする所信を述べられました。



講演①

幼児教育の今後

無藤 隆 先生

開会式の後には、会場を第二伝道会館 蓮華殿へと移し、まずは講演①『幼児教育の今後』の講題で、白梅学園大学大学院特任教授 子ども学研究所長の無藤隆先生にご講演いただきました。

無藤先生は、これまで文部科学省中央教育審議会や内閣府子ども・子育て会議の委員として、『幼稚園教育要領』の改訂や『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の改訂等に直接的に携わった経験から、今回の改訂の重要なポイントについて熱意を持ってご講演くださいました。



無藤 隆先生

特に、〃幼児期は人間としての土台を作る〃という視点から、その時期にふさわしい教育や、身につけるべき資質・能力について「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」と、具体的な例を挙げながらお話をいただきました。続いて、

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として具体的な10の姿を挙げ、イモ掘りや泥だんご等といった実際の保育現場の写真を示しながら、その資質・能力に向けた取り組み方について、わかりやすく説明をいただきました。

また、「見直し実践」の必要性についても詳しく説明をいただき、特に子どもの様子を観察するうえでメモや機器を利用して記録を残すことの大切さを力説されました。そして、その記録をもとに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等を視点として、資質・能力の深まりについての検討材料として成長の様子を文書化することによって、指導計画を改善してより良い環境構成をするよう、さらには残された記録をもとに小学校教育との連携に活用するよう、現場への要望を述べられました。

講演②

子どもを〃人間としてみる〃
とどういふこと

佐伯 胖 先生

引き続き、田園調布学園大学大学院教授の佐伯胖先生より、講演②『子どもを〃人間としてみる〃ということ』の講題で、お話しいただきました。

講演の最初に、NHKで放送された「ヒュー



佐伯 胖先生

マン なぜ人間になれたのか」を用い、今から7万4千年前に火山の噴火で寒冷期に入り、多くのホモ族が絶滅する中、現生人類のホモ・サピエンスだけが増えている理由は、遠方の部外者とも交流し、乏しい食べ物を分け合っていたからだという放映内容から、人は生まれた直後から「他者をケアする」という遺伝子が組み込まれていることを示されました。また、ハムリンの実験から「生後6か月ぐらいから赤ちゃんは〃よい、わるい〃の判断ができる」ということを紹介しながら「人間は本来道德的存在である。人間は間柄的存在である。人間は他者を気づかう存在である。だから、子ども（赤ちゃん）は本当に、〃人間〃なんだ」と話されました。

しかし一方で「私たちは子ども（赤ちゃん）を人間としてみてこなかった」との指摘もなされました。Reddyの研究を紹介しながら「心理学では赤ちゃんをモノのように観察し、モノのように〃反応させて〃そのモノを自分と切り離して理論つけてきた。これは、赤ちゃんを〃三人称的に〃見る行為だが、わが子を見る母親は、赤ちゃんを初めから〃対話の相手〃として、名前で呼びかけ、それへの〃反

応(反射行動)は、応答だとみなして関わっている。だから、Replyは、二人称的アプローチが大切だと言った」と説明されました。二人称的関わりとは「対象を、ワタシと切り離さない、個人的関係にあるものとして親密に関わる存在とみなす情動的関わりを対象、固有の名前を持つ対象として、どのようにあるか」として聞かせるか、聞き取るという関わり方であり、他者を感じ取るということ、おもしろい」と感じ方が大切である」と語られました。そして「いまこそ本当に必要なことは、ねば、べきから始めない、という決意であり、それは、感じ取ることから始めるということである」と示されました。

—2日目—

講演③

み仏さまのごともになって

西本照真先生

2日目は9時からのお朝事から始まり、武蔵野大学学長の西本照真先生より講演③『み仏さまのごともになって』の講題でご講演いただきました。

お話の冒頭に、大きな声で園歌を歌われ、その個性的な歌声が参加者を笑顔にさせてくださいました。そのあと、4年間、武蔵野大



西本照真先生

学附属幼稚園で園長をしておられた時のお話をお聞きしました。それは、子どもたちに「生きてる証」という

少し難しいお話をした時のこと、果たして子どもたちに伝わったかどうか不安だったけれど、子どもたちがそのお話の後、部屋に帰る途中「生きてる証は、生きてる私。生きてる私は、生きてる証」と大きな声で言っていたことを職員から聞かされ、子どもたちの感性の豊かさに驚かされたとのことでした。また、入園したての子どもの「生きてる証」に泣いたり笑ったりする親の姿に「親やなあ」と教えられたとも話されました。園長としての経験の中でお育ていただいた、と言いつける西本先生から、大切なことを教わりました。

また「生きる」という「苦悩」を受け入れることで人生が豊かになることを、「人称性」という視点からお話してくださいました。今は混沌の時代であり、個(一人称)の中に引きこもる現実、また親子の関係や友人関係等の二人称の関係が疲弊し弱体化している現実があります。そして、物質中心が進みAIによって、機械に人間がコントロールされる時代がすぐそこまで来ていると、三人称の現実を示されました。

私たちの特性だけで、この「人称性」を越えていくことは到底無理なことですが、そんな四苦八苦している現実からの解放、人間の苦悩を乗り越える阿弥陀さまの働きを「大いなる二人称」という言葉で、たくさんのお話を聞いて分かります。また、やさしくお取り次ぎくださいました。また、やさしさ・しなやかな心・強さを育むことの大切さを人間味あふれる言葉を持って示され、心温まる素敵な時間を参加者一同に届けてくださいました。

パネルディスカッション

引き続き行われたパネルディスカッションは、『まことの保育のこれから』のテーマのもと、西本照真先生、真宗保育学会理事長の若原道昭先生、教育原理委員会の丁野恵鏡委員長、鷺尾純一委員に進行していただきました。まず鷺尾先生より、幼保一体化の大きな改革が進行中であり、「新幼稚園教育要領」「新保育所保育指針」等には幼児期教育に求められる共通のものが盛り込まれている点、そしてこれは自分のよさの認識・あらゆる他者の尊重、持続可能な社会のつくり手など、もともと「まことの保育」がめざしているものと共通した目標が掲げられている点を指摘され

ました。

この指摘を踏まえ、パネラーの先生方それぞれのお立場から、『まことの保育のこれから』についてお話をいただきました。西本先生は、自身の勤めている武蔵野大学の学生について、「皆、優しくて素直でよい子たちだが、就職活動になると主体的活動力に弱さを感じています。優しさや素直さは私の慈悲が反映されているものと思いますが、今後の課題としては私の智慧に裏付けされた実践力も重視していきたいと思います。AIが一層発達する未来では、知・情・意のバランス、『誰一人取り残さない』という国連が提唱する持続可能な開発目標(SDGs)にそった人材の養成が求められ、生きる力を鍛えるための、大いなる二人称が大事になってくるでしょう」と述べられました。



西本照真先生(左)、若原道昭先生(右)

また、若原先生からは、真宗保育学会と保育連盟の「まことの保育」は理論と実践の両輪であることを認識したうえで、当学会の設立の経緯と沿革が縷々述べられ、学会の現在の課題について、次の2点をお話いただきました。

①真宗保育の役割について、まだまだ十分な業績が残せていないのが現状であり、真宗保育を理論と実践面から専門的に研究する人材の養成に努めたい。

②「まことの保育」実践者を養成するコース、「まことの保育」の理想的な保育者像のモデルを学会で示したい。

丁野先生からは、教育原理委員会で企画・発刊の『真宗の教えとまことの保育』(2014年)、『知っておきたいまことの保育』(2016年)、『最新の「真宗の教えとまことの保育」に学ぶ』(2018年)をふまえ、長年考えてきた以下の4つの課題について述べられました。

①いのちを大切にするという課題

②私は他者とのような関わりの中で生きていくか？(集団と個の関係)

③叱ったりほめたりするのはなぜか？

④子どもが安心して遊べる(活動できる)環境とは？

こうした課題に取り組む中で、子どもを「仏の子」として恭敬くきやうしていくことの大切さを示され、自身が30才で園長に就任したばかりの頃、園児からもらった手紙「園長先生はなぜ園長先生になったのですか？」に驚愕し、「これ以降、仏教大学保育講座などで真剣に学ぶようになり、子どもたちにずいぶん教わりま



鷲尾純一委員(左)、丁野恵鏡委員長(右)

した。仏さまが、子どものことは、姿として現れてくださったと思います」と述べられました。

また、参加申込書で寄せられた参加者の方々の「まことの保育を実践するうえでの課題、悩み、取り組み」の紹介があり、「まことの保育とは一人ひとりを大切にしたい保育である」「まことの保育とは何かについて共通理解を図ることが大切である」「混迷の時代に宗教的情操教育が必要である」「園児に仏さまという存在をどのように伝えるか」等について、パネラーの方々よりご意見を頂戴しました。

総括として、鷲尾先生より『子どもをしっかりと抱きしめれば、その子は「ああ、このお母さんの子に生まれてよかった」と思います。自園の辞令交付の時、「子どもたち一人一人が、自分が大切にされている」と感じる保育をしてください」と言います。これに加えて「生まれてきてよかった！」と思えることが大事だと思います」と述べられ、まことの保育がこれからもめざすべき方向性が示され、深い学びの中で全国セミナーが締めくくられました。